紀行・見聞

狂犬病がない国に住む獣医師から見た犬事情

～フィリピンと日本の比較～

今本成樹[†]（奈良県獣医師会）

2024年の11月末に私自身2度目のフィリピンを訪問する機会があった．祖父の兄（今本時男：図1）が第二次世界大戦の時にフィリピンで4年間第16師団の輜重兵として従軍して最後はレイテ島で戦死しており，8年前にその足跡をたどり祖父に伝える旅をした．2度目となる今回の旅は，アジア歴史資料センターに残されている日本陸軍の戦闘記録の中に今本時男の名前があったので，その地を訪問することが目的であった．今回の訪問では，日本陸軍が降伏したキアンガンという場所まで足を伸ばしたが，その途中で航空機による初めての特攻が行われた飛行場や慰霊碑，日本海軍司令部があった洞窟を地元の歴史家であるデラクルーズ氏の案内で見学させていただいた．この途中で多くの村々での動物と人の関係性を見聞して話も聞いてきた．さらに前回のフィリピン訪問の際に看板を見て気になっていた，「Animal Bite Center（アニマルバイトセンター）」をマニラ近郊で訪問し，動物病院を見学する機会も得たので報告する．

輜重とは，軍隊の糧食・被服・武器・弾薬など，輸送すべき軍需品の総称であり，その輸送を担当したのが輜重兵であった．当時の記録では，16師団獣医部からの報告もあり馬の疾病管理についての報告も見ることができた．

フィリピンの総人口は日本に近く，日本が1億2,379万人（2024年11月）に対してフィリピンが1億1,733万人（2023年）である．一方，犬の飼育頭数は，日本が約600万頭に対してフィリピンは約1,700万頭（NTTデータ経営研究所，2022年統計）である．ルソン島やレイテ島では集落ごとに犬がいる風景があり，幼少期に見た昭和の街中で犬が放し飼いにされているような風景であった．「この犬は，誰が飼っているの？」と聞けば「あぁ，この辺の犬だよ．」という答えが返ってきた．日本では地域猫という言葉は浸透したが，地域犬という言葉を聞かないのは狂犬病予防法第6条によるものであろうが，犬が自由に歩いているのが生活の一部となっているフィリピンの状況を見た時，日本との違いを感じた．

現地の状況を知るため，まずパサイ駅前のショッピングセンター3階にあるアニマルバイトセンター Prime Care Pasay を訪れた（図2）．ホテルからは5 kmほどの距離があったが，大通りから生活感が溢れる場所を見ながら歩いて向かった．生活のすぐ近くに犬がいる状況だったが，攻撃的な犬はおらず，路上で寝ている犬も多数見かけた．裸足で歩いている子どもが子犬を大事そうに抱いていた姿が印象的だった．1時間ほど歩くと，アニマルバイトセンターに到着した．そこで，今回いろいろとマニラ市内の動物関連の場所を案内してくださった川上麻衣氏と合流した．その段階ですでに2人の患者が待っていたため，受付の方に業務が終わってからインタビューをさせてほしいと話したところ快諾していただけた．

図1　第16師団輜重部隊に所属した今本時男

† 連絡責任者：今本成樹（新庄動物病院）
〒639-2144　葛城市葛木104-1　☎0745-69-1111　E-mail : imamoto@celery.ocn.ne.jp

図２　ショッピングセンター内にあった
アニマルバイトセンターの入り口
中では受付１名，看護師１名がいた．

図３　待合室に貼られていた咬傷時のリ
スク分けカテゴリーのポスター

アニマルバイトセンターは，動物に咬まれた人が訪れる場所で，主に咬まれた後の暴露後免疫として狂犬病や破傷風のワクチン接種を実施している場所である．待合室では狂犬病関連の動画が流されていた．狂犬病で娘を亡くした母親が遺影を持ちながら話をしている状況に続き，その娘さんが医療スタッフによりベッドに拘束されていく状況が流れました．フィリピンには人の病院の中に，暗くされた「狂犬病で死を待つための病室」があるそうだ．そんな話を待合室で聞いている間に，患者２名がワクチン接種を済ませて 1,080 ペソ（3,000 円弱）を支払って帰った．マニラの平均月収が約 26,000 ペソ（68,000 円）であることを考えれば，咬傷後に暴露後ワクチンとして１カ月以内に５回接種するのは経済的な負担も大きい．待合室には，犬に咬まれたらどうすればいいかを説明するポスターも貼られていた．どの国でも民間療法があるようで，ニンニクを塗っても塩を塗ってもダメで，とにかく咬まれたら，アニマルバイトセンターへ来てほしいということを伝える内容だった．自分の想像を超えた情報量を整理する間もなく，インタビューの時間となった．

まずは，狂犬病の現状について話を聞いた．現在フィリピンでは年間約 300 人が狂犬病により亡くなっているが，先日，フィリピン国内で狂犬病に関するドキュメンタリー番組が放送されてからは，アニマルバイトセンターに１日 20 人ほどが来るようだ．2024 年もマニラのある一地区で 16 人が犠牲になったケースもあり，狂犬病が本当に身近にあるリスクだと感じた．アニマルバイトセンターでは，犬に咬まれた場合には３つのカテゴリーに分けて診断される．そのポスターが待合室に貼られていた（図３）．

カテゴリー１は，その動物に給餌したり触れたりした人が対象となる．舐められたりしておらず，その部位に傷がないといった感染リスクが低い状況で，咬まれていないことが明らかな人たちがこのカテゴリーである．

カテゴリー２は，傷や出血の有無に関わらず，咬まれたり引っ掻かれたりしたケースである（首から上に傷を受けたらカテゴリー３）．カテゴリー２からワクチン接種が実施される．28 日間で複数回のワクチン接種（咬まれた後０日目，３日目，７日目，14 日目，28 日目に接種）が実施される．

カテゴリー３は，出血を伴う傷があるケース，感染死体を無防備な状態で扱ったようなケース，コウモリからの暴露リスクとカテゴリー２の状態でも首から上の傷が該当する．このカテゴリーでのワクチン接種では，傷口に直接注射する狂犬病免疫グロブリンの接種が行われることもある．

以上のようなカテゴリー分けのためのフローチャートがあり，問診をしながらカテゴリーが決められる．カテゴリー３となるのは子どもが多いそうだ．子どもが咬まれるのは顔が多いという話を聞いた時，ここに来るまでの道中で見かけた子犬を抱いている裸足の少年の姿を思い出した．彼らが咬まれた時，ワクチン接種をする費用を負担できるのかとても心配になった．一方，フィリピンには多くの島があるが，いくつかの島では狂犬病はないと聞いた．フィリピンも日本のような島国であり，いつの日か狂犬病清浄国になれることを願う．１時間ほどのインタビュー終了後，このショッピングセンターの１階でケーキを買ったが，そうした日常の風景の中に狂

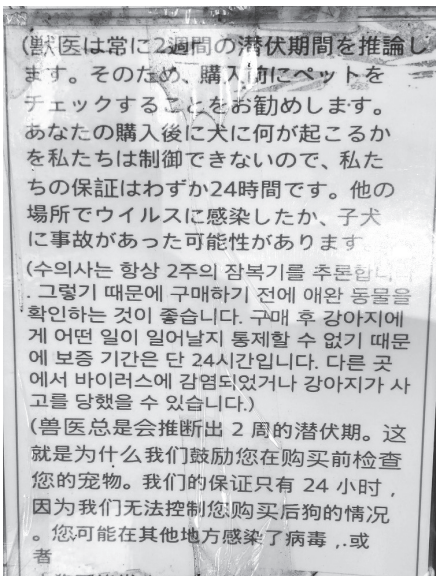

図4　ペットショップで見つけた日本語の注意事項

犬病が溶け込んでいる実情を見て，日本が狂犬病清浄国であることがいかにありがたいかを痛感し，その中で狂犬病へのリスク管理が甘くなっている自分に気がついた．

その後，マニラ市内のペット市場を見学した．ここでは，9,000～12,000ペソ（2～3万円）という価格帯でペットが販売されていた．チワワやミニチュアダックスフンドもいたが，チャウチャウが人気のようで，どの店舗にもチャウチャウがいて販売員が抱っこをさせてくる．生体保障は24時間以内という記述があった（図4）．このあたりの店で購入した場合には，パルボウイルス感染症やジステンパーウイルス感染症が多いということだった．私は，先ほどの狂犬病の話を聞いた後なので，犬を抱こうとは思わなかった．

最後にマニラ首都圏のマカティーにある，現地でも屈指の設備を誇るANIMAL HOUSEという動物病院を見学した．院内ではさまざまな機材（デジタルのX線検査装置，超音波検査専用の部屋，診察室は10室，他にガラス張りの手術室）があり，検査室ではウイルス検査でPCR検査も行っていた．検査費用はバベシアのPCRで4,000ペソ（10,000円以上）であった．受付ではわれわれも扱う療法食を日本と同じような価格で購入して帰られる方もおられた．入院ケージは約50あり，パルボウイルスに感染した犬が隔離室に数頭いた．

「血便ならパルボ，鼻水があればジステンパー，よだれ垂らしてぐったりなら狂犬病も疑う．」という言葉を聞いて，予防が浸透して感染症への認識が甘くなっている自分に気がついた．日本では50年以上狂犬病の発生がないことを伝えると，大変うらやましそうだった．日常の犬や猫の診察にあたっては，狂犬病ということを常に頭に入れないと命に関わるという環境から見れば，日常の診療で攻撃的な犬を診療する時に，日本のベテランのスタッフや獣医師が咬まれないように保定している行為は命がけの行為に見えてしまうようだ．犬の口腔内チェックも狂犬病のリスクを考えたら気軽にできないことも知ることができた．よだれを垂らしてぐったりした猫をそのまま安楽死し，狂犬病の検査に提出したところ，検査結果が狂犬病ではなかったという例もあるようだ．フィリピンの獣医師は毎年狂犬病の予防接種を受けており，犬に咬まれた場合には，狂犬病のワクチンの暴露後接種を受け，同時に破傷風のワクチンも接種するそうである．

ま　と　め

今回，首都マニラ圏内だけではなく地方都市における人と動物の暮らしもじっくりと見ることができた．アニマルバイトセンターやマニラ屈指の設備の動物病院，ペット市場で生の声をじっくりと聞くこともできた．現地に精通しさまざまなサポートをしてくださった日本全薬工業㈱の榎本大介氏と川上麻衣氏には，この場をお借りして感謝の意を示したい．

第2次世界大戦の戦跡をめぐり線香をあげる祈りの旅の中で，未来の日本のために異国の地で亡くなった先人の方々と同じ空を眺め同じ空気を吸って感じたことはたくさんあった．同時に，フィリピンの動物関連の現状を見て『狂犬病のない国，日本』を作り上げた獣医師の先人の努力のすばらしさを感じた．2つの意味で先人たちに感謝し，その気持ちに応えるように生きていこうと思った旅であった．

外国に行くと，犬がいれば「おいで．」と手を出していた私の中には，自分は大丈夫だろうという気持ちがあった．現地在住の日本人からは「日本では犬は家族になっているから，フィリピンみたいに番犬としての役目がなくなったのかもね．」と言われた．大きく違う2国間の現状を自分の目で見ることで，多くのことを考える機会となった．

日本では，安全安心な環境で診察できるが，狂犬病がある国では咬む犬への対応は大きく異なる．動物病院で咬みにくる犬が非常に少ないのも印象的だった．犬が社会に溶け込んで家族として認識されるようになった日本だが，自分の飼っている犬が獣医師を含む他人に対して咬みにくることへの意識が鈍いのは狂犬病がないという現状が影響しているのだろうかと，帰りの飛行機の中で考えた．これからも狂犬病のない国で獣医師を続けていけることを願うばかりである．

参　考　文　献

［1］ 村中志朗：伴侶動物飼育数減少とその課題～高齢者の動物飼育支援～，日獣会誌，68，608-610（2015）